2023.5.22.
T. Kobayashi

花見川を楽しむ
思索・詩作・試作　の散歩道

久しぶりに、少しばかり「二十六文字詩」の勉強をしてみようと思い立った。
折り込み都々逸の課題として「花見川（はなみがわ）」に挑戦してみることにした。素材は、町で、乗り物の中で、近所で、実際に目に入ってきた景色から。
何となく見て、何となく忘れてしまう日々の暮らしの中の景色も、いざそのつもりになって眺め続けてみると想像以上に面白いものだ。

花が咲き誇る時期が例年より早かった今年、5月になると花が終って柔らかな緑の芽吹きが真っ盛りになってきた。この時期は、どこかへ出かけてみたくなってくる。

はなはさかりにみどりももえて　がぜんうきたつわがこころ
（花は盛りに緑も萌えて　俄然浮き立つ我が心）

近所の　Aさんの家の庭は、様々な花が並び、様々な木が植えられていて、季節折々通りがかりの人々の目を楽しませてくれる。温かな陽差しの中で、老夫婦が椅子を出してお茶を飲みながら自前の庭の風情を楽しみ雑談している。たまにその席へ呼んで下さることがあり、お庭を見せていただく。穏やかな景色の中でする穏やかな雑談には心地よさがある。

花が咲いたよ見に来ませんか　我流なれども我が庭を

買物をしようと思って船橋へ出てみた。我が家の周辺の町並みに比べれば船橋は大都会で人の行き来も多くにぎやかだ。京成船橋駅とJR船橋駅を結ぶ連絡通路の真ん中で、他の人の迷惑になっていることにも気がつかずに立ち話に夢中になっている三人連れの女性がいた。周りの景色が見えていない人達だなと思いながら凝視してみたら、一人のおばちゃんの手提げのバッグのふたが開いている。横を追い越しながら覗いて見たら、携帯電話とお財布と貯金通帳が見えた。「盗ってちょうだいな」と言わんばかりのバッグ、そんなこととも知らずに大道に広がって弾む立ち話、人通りが皆邪魔そうに睨みながら通過しているというのに・・・・

話に夢中で見えない周り　がら空きバッグもわからない

JR船橋駅へ入るための下りエスカレーターに乗ったら、前を歩く女性のザックのファスナーが空いたままになっているのが見えた。山ほど入ったカードで膨らんだお財布が「持って行ってもいいわよ」と微笑んでいた。しかも当人は全く気がついていないわけなので、周囲に人の目さえなければ誰にでもできそうな感じがした。しかし、エスカレーターの後からは別な人が覗き込んでいるわけだし、理性と常識が邪魔をして手を出すには至らなかった。
エスカレーターを下りたところでこの女性を追い越しながら、「うしろのふたが開いていて財布が丸見えだよ」と教えて上げた。女性の驚きの表情から見て、全く気付いておらず全く意識もしていなかったという感じだった。
犯罪の危険性はどこにでもウヨウヨしているが、「犯罪を誘発する光景」もどこにでも転がっている。

道端で男女が何やらもめていた。女性の眼はつり上がっており、眉間にしわもよっていた。夫婦ではなさそうだが、親子・兄弟でもなさそうだ。経緯がわからないので、こういうものには関わらないのが一番。

話したくない見たくもないわ　我慢の限界別れましょ

用事を済ませて帰りの電車に乗ったら、若い二人連れが腕を組んで乗ってきて目の前の席に座った。
席に着くや否や二人ともポケットからスマートフォンを出していじり始めた。若い二人連れがどんな会話をするのだろうかと注目していたのだが、会話は一向に始まらないばかりか、顔を見合う場面すらなく降りていった。

次に乗ってきたのは 4 才ぐらいの女の子を連れた若い夫婦。三人並んで座ったところまではごく当たり前な光景だったのだが、座るとすぐに夫婦はスマートフォンを操作しながら二人だけで盛り上がっていた。少女はその間、車窓の景色を楽しそうに右へ左へ目玉を動かしながら・・・・。好奇心の塊のような目つきで車窓を流れ去る景色を楽しんでいたのだが、見えたものや驚きや疑問を口に出したり親に話しかけたりするわけでもない。この子は大きくなってからどんな大人になるだろうか、やがて親になってからどんな子育てをするのだろうか、などなど要らぬ心配が脳裡をよぎり、「少しぐらい子どもの顔を見て雑談したら？」と言いたくなってきた。
ある駅に着くと、少女がひとこと 「着いたよー」

話もしなけりゃ見もせず顔も 画面に食いつく若いペア

近所を散歩していたら時々出会う女性とすれ違いざまの立ち話になった。体調や近況を問いかける程度の軽いやりとりのつもりだったが、最近出会った知人のことを色々語ってくれた。こちらは別に聞きたいわけでもないが、久しぶりなので、黙って聞き役になった。色々な人の話が登場したが、この手の話には「褒め事」はあまり出てこない。挙句の果てが、さる人との雑談が大変不愉快だったと、その人の悪口をたっぷり聞かされた。

話も長いし見栄はるばかり 我（が）ばかり通しわがままで

噂話が人から人へと伝播していくきっかけはこんなことなのかもしれないから恐ろしい。

ある日の昼前、すれ違った見知らぬ人に声をかけてみた。「暖かいですね」「そうですね、気持ちいいですよね」季節の変化や気候・天候の特徴をとらえて話しかけると、見知らぬ人とでも会話のきっかけが作れることが多い。何回かすれ違う内に、さらに中身のある話に発展していくことになる。
「花が咲いて、花の香りがして、小鳥が来てさえずって、緑もきれいだし、いい季節ですね」と続けてみた。
「花粉症で臭いがわからないし、歳のせいか耳も聞こえなくなって・・・・」と、何やらぼやきになってきた。

鼻が悪いし耳聞こえない がたがたなのよ我が体

家に帰って久しぶりに落語でも聞こうかなと。CDラックから何気なく取り出した一枚は、三代目三遊亭金馬の「茶の湯」。やはり、この人の落語には味がある。テレビ時代の落語家にはない深い深い味わいが。

離れで茶会と皆誘われた 外聞気がかりわしゃ行かぬ
はなはだ迷惑皆呼び茶会 がっかりしました和菓子まで

そして、最後に「花見川」の呪縛から解放されて自由な一作。それにしても、「洒脱な逸作」への道のりはかなり嶮しいものだ。

金馬の茶の湯で一日（ひとひ）を締める 冷めし茶碗のひとすすり

以上